

その夜

菊井が病家廻りから歸つたのは、彼れ此れ五時ちかくであつたらう。電燈は疾くについて、門前に豆腐屋の荷が下されてあつた。

尻尾を振り乍ら^{なが}、靴ぬぐ手に擦りつく愛犬^{いぬ}の頭に手について玄関に上ると、其靴を下駄箱の上に乗せて、車夫はやがて歸って行く。

『お歸^{かへ}なさい』

勝手と、患者控所の、仕切りの障子を開けた出会頭、によつきりと背の高い太一が、ぶつきら棒な挨拶をする。紙笠の二分心の洋燈を持つて居た。二人とも其儘黙つて、菊井は自分の部屋に入る。外面^{そとも}から俄に入つた部屋は薄暗い。何とはなしに舌鼓をして、反り返つて胸の釦を外してゐると、太一がニッケル台の洋燈を持つて入つて來た。ホヤの膨らみに、指先大の曇りが残つて居るのを、黙つて入つて來て、黙つて机の上に置いて、黙つて出て行く。其大きな體が忌々しく思はれた。それと入れ違ひに、例もそはそとした、襷掛けの妻君がはいつて來た。

『只今』

と入口の疊に一寸手をついて、暖めたぬくみをさまさぬやう、胸に抱いた着物を着せかける。

『寒かつたでせう』

と勞ひ乍ら、耳は臺所に欹てゝ居る。襟を揃へて、背筋を撫で下して、其儘さつさと出て往つてしまふ。

四邊を片付けて、ランプを細目にして、茶の間の明るみに出て來ると鐵瓶の湯は勢宜くたぎつて居て、むっと暖かい。

『夏やご覧な、彼様に夕焼けがしてるよ、ね先刻の地震でお天気になるんだよ』

廊下に妻君の聲がする。すると台所では消魂^{けたま}々しく、

『叱つ！ あれ、奥様大變です、玉が……玉が……』

パタパタと上草履の音。

『何だい まあ』

と其處の障子を開けた妻君の声も疇高い。

『玉がお魚……あれ！ 畜生入っちゃまいやがつた！』

『盜^とつたの？ まあ何だいお前其處についてた癖に……仕様がなねえ、畜生此頃縁の下

に入るの覚えやがったから……仕様がなないねえ眞んに』

『一寸の間……』

と辯解らしく云ふとするのを、

『一寸の間もありやしない！ 目の前に猫が居るのを知ってながら、油斷するのが悪いんだよ』

と當り前なことを腹だゝしげに云ふ。暫くしてから、

『貴夫、今んちお湯に往つてらっしゃいよ！』

と命令するやうに大聲して、猶ぶつぶつと小言を云つて居る。

廣げた新聞を二つに折つて、菊井は云ふがまゝに湯屋に向つた。弓なりに曲つて居る町はづれに、半鐘高く聳えて一面の雲の紅、後れた鳥が一羽急ぐ。ふと先刻の、妻君の言い草を思ひ出した。『地震で天氣になる』菊井は繰り返して苦笑した。

濛々と立ち騰る湯氣に包まれて、光の鈍い洋燈を見噴めたり、欄間に張られた色硝子の、汗の流れを眺めたり、陶然となつた菊井は、聞くともなしに調子高な女湯の話に耳を傾けて居たが、愕然として湯の中に立つた、祖母らしいのが、孫の病氣の快くなつたことを、尋ねられた女に語つて居るのだ。

『さすがは違ひやつさ、お見立ては確かなもんですぞい、はあ確かなもんです。』

と繰り返して云ふ。無論それは小針醫學士のことである。

『お陰で命拾ひしやした、はあ』

一人は湯槽に入つたらしい、話はそれぎり止んでしまった。

菊井は矢鱈に水で顔を洗つた。晝間の不快な心が、むらむらとまた盛り返して来る。小針醫學士の腕を稍賛へる其言葉のうちに、自分の無能を罵られたやうな氣持ちがするやうで、『なあに』と自信力を呼び起して見た。戦はねばならぬと叫んだ先刻の心いつかまた一方から急激に頭を擡げて居る。

夕飯時とて浴客は少なく、例の通り長湯して男湯の戸を出た菊井は星のちらちら見え初めた空を仰いで『なあに』とまた心に言はせて歩き出した。『なあに』の次には、『今に』と云ふ語が控えて居る。

夕飯も無言で喰つた。茶も無言で飲んだ。其まゝずっと部屋に引いて其机の洋燈を持つて隣室の書齋に入る。机掛けの曲つて居るのを直して其上に巻紙をのべた。

『拝啓』と太く染めて、

『いよいよ押迫り申候其後は』と書いて一寸筆をとめる。

『……幸ひ當院はもと銀行の跡に候へば、間數も可なり多く、御夫人御同伴にても同居苦しからす候。また當地は他に比して物価も安く當分のお身過ぎには持つて來いの土地と存せられ候』

『……猶此みぎり多少經驗のある看護婦一名雇ひ居れ度、御心當りは是無く候哉……大擴張いたす心組に御座候』

云々と一先つ筆を擱いた。

あはゝとまた笑ひ聲が響く。さも大喰ひの、口の大きな顔を想像させるやうな聲である。

『あれは駄目だ!』と口に出して言った。

『一年あまりを東京の櫻井病院で暮したことのあつた妻君には、今後とて子の出来る見込みはない。小學を卒業した時、番頭にでも遣つてしまふと田舎の養父が言つたのを、俺が醫者に仕立てゝ遣ると連れて來て、菊井は太一を中學に通はわせた。けれども太一は三年になる時に落第した。恰度書生の若山が逃げて居なかつた時なので其まゝ藥局に使つて居た。其當座こそ今に今にとまた學校に出す積もりで居たが、續いて來た山田といふのも、三月ばかりで逃げ出してしまふし、一向見込みがないと云ふことがわかつたので通學は其まゝお流れとなつてしまつた。太一はべつに不平も言はない。どうかすると茶の間に聴こえるやうな鼾をたてることはあるが、夜はそれでも自分の部屋に、生理學などをひねくつてゐる。

『あれでも醫術試験を受ける積りで居るから可笑しい』

と菊井は時々慥んなことを思ふ。

ふとも一人の聲の、もと居た書生の山田に似てゐることを思ひ出した。來る書生も、來る下女も長く居たことのないことを思ひ出した。

折りからまた妻君がまた、何やら下女に小言を言てるのが聞える。菊井は未だ巻かない手紙の面を見て厭な顔をした。

『ではね爺や、明後日は間違ひなく來ておくれよ、いゝかい明後日だよ、しらじら明けに搗かれるやうにね、餅米は明日のお午前に掻いとくと恰度いゝね、ねえ夏、あゝそれから爺や、また今年も七五三縄をね さう……六……七本ばかりもつて來ておくれ、松も! あゝ忘れないでね……あいよご苦勞』

やがて爺が出て行く氣合がする。

仙臺醫院内、熊谷滿哉殿と書いて裏を反して菊井納、十二月廿九日と書いて筆を擱いた。手が冷たくなって居た。

入力者注…底本にないルビを加えました。

「乍^{なが}ら」「見^みづめたり」

「擡^{もた}げて」「恁^こんな」「搗^つかれる」

「稍贊へる」は底本のままです。

底本…「水野仙子全集」第一卷

初出…「文章世界」明治四十一年二月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年九月十日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)